
論 説

田中耕太郎と南山

青 木 清

はじめに

- I. 田中耕太郎のアドバイス
 1. パッへの校長式辞
 2. パッへの計画
 3. 文部省学校教育局長としての田中耕太郎
 4. 外国語専門学校の設置認可
- II. 南山（名古屋）外国語専門学校・南山大学の開設
 1. 文部大臣田中耕太郎の祝辞
 2. 外専での講演会（1947 年 10 月）
 3. 新制大学としての南山
 4. 学校法人南山学園評議員

むすびに代えて

はじめに

2021 年度、南山大学は、前身の南山外国語専門学校の設置（1946 年 9 月）から数えて 75 年を迎え、一年間にわたり 75 周年記念行事を実施してきた。筆者は、この一連の行事の中心ともいえる「記念式典」において、「南山大学の礎『外専』からの 75 周年」という報告を行った。それを準備する中で、南山外国語専門学校、さらにはそれに続く南山大学の開設に関して、昭和の日本を代表する法律家、田中耕太郎が大きく関わっていたことを認識するに至った。記念式典において簡単に触れたものの、あらためてその内容を

明らかにしたく、南山法学への寄稿としては異例ではあるが、法学者田中耕太郎と南山の関係について、論じさせて頂くことにした。

ここにいう田中耕太郎とは、もちろん、戦前は東京帝国大学の商法講座の教授として、戦後は文部大臣、最高裁判所長官そしてオランダのハーグにある国際司法裁判所の裁判官として活躍した、あの田中耕太郎である。彼が熱心なカトリックの信者であることは一般によく知られているところであり、また、彼が南山外国語専門学校発足時の文部大臣で、その開校式に文部大臣として祝辞を寄せていることは、南山の、とりわけシニア関係者に広く共有されている事実である。こうしたことから、両者の間に一定の結びつきが存在することを推測する関係者は少なくなかった。しかし、両者の繋がり単なる結びつきのレベルに留まるものではなく、南山外国語専門学校設立前から南山大学設立後まで長期にわたり、南山は、田中の助力を得ていたことがわかった。

今号は、長年、南山大学副学長および南山学園常務理事を務めた丸山雅夫教授と、同じく長年、南山学園の顧問弁護士を務め、南山大学のロースクール発足とともに実務家教員としてそれに加わって頂いた久世表士教授の退職記念号である。「南山」にご貢献頂いたお二人への献呈であれば、こうしたテーマも許されるのではないかと考え、その内容をまとめ、寄稿させて頂くこととした。

I. 田中耕太郎のアドバイス

1. パッへの校長式辞

田中耕太郎の名前が南山の資料の中で最初に出てくるのは、戦後直後の1945年11月の出来事に関連してである。その出来事は、1946年9月開催の南山外国語専門学校開校式におけるパッへ校長の式辞の中で紹介されている。パッへの校長式辞は、南山学園資料集にローマ字表記の形で残されている

る¹⁾。冒頭を紹介すると、次のようになっている。

Nanzan gaikokugo semmongakkô kaikoshiki shikiji.

Honjitsu koko ni Nanzan gaikokugo semmongakkô kaikôshiki ni atari, 「NA-GOYA TEIKOKU SOCHOKAKKA wohajme」 raihin kakui oyobi 「s」hinnyuûsei shokun no mae ni, kôchô to shite, honkô sôritsu no yurai genjô narabi ni shôrai ni tsuite môshiageru koto wa, watakushi no mottomo kôeito zonzuru tokoro de arimasu.

Kaeri mimasuru ni, Nanzan Chûgakkô sôritsusha ko Josef Reiners hakase wa gakkô sôsetsu ni atatte, kôgyôgakkô ni subeki ka, shôgyôgakkô wo torubeki ka, aruiwa chûgakkô wo erabubeki ka ni tsuite jukuryô no kekka tsui ni, chûgakkô setsuritsu ni i wo keshita no de arimashita. ……

このうち、田中耕太郎の名前が出てくるくだりは、次のようになっている。ローマ字表記のままでは読みづらいので、以下、かな・漢字に変換して表記する。なお、明らかに誤記と思われるものは、適宜、修正した上で変換している。

式辞の中で、パッへは、南山学園の創立者ライネルス神父²⁾が前年の1945年8月に亡くなったことに言及し、その上で、次のように述べる。「同師の衣鉢を継ぐ私どもは、南山中学校を、かねての計画通りの方向に発展せしめることをもって、亡き先輩の遺志を全うするものと考えました。／しかしながら、昨年11月上旬の命を受け、当時の文部省学校教育局長、現文部大臣田中耕太郎氏を訪問、私どもの計画を打ち明けたところ、同氏より、高等学校設立の見込みは実現性に乏しく、むしろ専門学校ならば或いは可能で

- 1) 南山学園史料集『名古屋外国語専門学校史料集』（南山学園、2005年）（以下、外専史料集と略称）巻末10–11頁。南山外国語専門学校は、開設翌年の1947年から名古屋外国語専門学校と改称している。なお、南山学園が発行する各史料集並びに以下で引用する学園および大学の周年記念誌は、いずれも南山発祥の地（名古屋市昭和区五軒家町）に所在する「南山アーカイブス」にて閲覧可能である。
- 2) ライネルスもパッへも、カトリック修道会「神言会」所属の神父である。神言会は、1875年に海外宣教を目的としてドイツ人司祭A・ヤンセンによって作られた組織で、日本では、1907年から宣教活動を始めている。ライネルスは、1909年8月に来日している。

あろうと助言がありました。私どもは、かねてかかる場合を予想しておりました故、それでは、外国語専門学校ならば設立認可の見通し如何と尋ねましたところ、認可の見込み十分との確言に勇氣百倍、直ちに設立準備に着手、本年2月初旬、必要なる準備を完了、3月21日、当局に正式設立認可申請の手續を踏み、その間紆余曲折を経て、ついに7月13日にいたり、設立認可を得た次第であります。』³⁾と、この間の事情を紹介している。開校式の校長式辞としては、いくら異例ではあるが、そこには、当時のパツへ校長の率直な思いが表現されている。

式辞の中にある「かねての計画」とは、どのようなものだったのであろうか。パツへ自身、式辞の他の箇所、それを以下のように表現している。すなわち、ライネルスの名前を出した上で、「平素、同師の感化により、カトリック教会は、日本人の教育において特に精神科学の方面に貢献をなすべきであるとの信念を抱いて参りました。この信念は同師の25年にわたる日本在住より生まれたものであります。そこで、同師は中学校設立に意を決し、その下に小学校を、上には高等学校を設けんと考えたのであります。』⁴⁾と述べている。実際、旧制中学校は昭和7(1932)年に、小学校⁵⁾は昭和11(1936)年にそれぞれ設けられていることからすれば、残すは旧制高等学校ということになる。南山学園75周年記念誌においても、戦後の再出発にあたって、「パツへは、ヨゼフ・ライネルスの教育の理想を実現し、彼の抱いた学園発展構想を継ぐために、南山はまず高等教育から始めることを考えた。』⁶⁾と記されている。

3) 外専史料集巻末11-12頁。

4) 外専史料集巻末11頁。同旨のことは、『南山学園の歩み』(南山学園, 1964年)(以下、歩みと略称)9頁(松風誠人執筆)にも示されている。

5) 小学校は、昭和16年に名古屋市に移管され、市立八事小学校となった。

6) 『HOMINIS DIGNITATI 1932-2007 南山学園創立75周年記念誌』(南山学園, 2007年)(以下、学園75年誌と略称)63頁(會澤俊三執筆)。

2. パッへの計画

これらの式辞や史料からパッへの高等教育への思いを読み取ることができ
るものの、ライネルス自身が高等教育機関設立にどれほどの関心を有してい
たかは、必ずしも判然としない。少なくとも、それを直接に伝える史料は見
当たらなかった。確かに、彼の使命は、神言会から託された、そしてその後
ローマ教皇庁布教聖省からも求められた日本における教育事業の展開であっ
た。ライネルスは1909年8月に来日したものの、すぐにはその事業に着手
できず、前述したように1932年にようやく中学校を設立することができた
のである。当時は世界恐慌の時期にあたり、国内でも授業料滞納者や中途退
学者が続出し、一部には廃校の危機に直面した学校もあり、他方で、文部省
は実業学校以外の中学校の新設を容易に認可しない方針を採っていたことか
ら、学校設立に際して、地元の有識者たちは、名古屋の土地柄を考えて商業
学校を作ればと勧めたようであった。しかし、ライネルスは、あくまで中学
校の設立にこだわったとのことである⁷⁾。その点に関するパッへの言による
と、「技術よりも心の訓練と高い教養を身につけさせるに適した普通文科系
の学校」⁸⁾の創立を意図していたとのことである。『南山大学五十年史』に
は、「神言会創立者ヤンセンは、日本の布教地を委ねられたときから大学設
置の可能性を考えていたが、ライネルス自身は専門学校や大学の設置を考
えていなかった。専門知識よりも人格形成、特に個性の尊重、人格に自由の理
想を高く掲げた教育を目指し」⁹⁾ていたという記述がある。

こうしたことから、ライネルスは教育事業の展開を自らの使命としていた
ものの、ここでは専門教育よりも「心の訓練と高い教養」の修得を第一に考

7) 青山玄『ライネルス師とその人柄』（南山学園，1994年）28頁。同旨のことは、歩
み9頁にも記されている。

8) 同上。

9) 『南山大学五十年史』（南山大学，2001年）8頁（リチャード・ジップル執筆）。

えていたようである。専門学校、そしてそれに続く大学の設置という戦後の南山の展開は、ライネルスのお考え方の延長線上に位置するものと評価できるものの、それはパツへの強い思いが反映した結果であると理解するのが実際に即していよう。

ところで、式辞の中にある、文部省学校教育局長を務めていた田中耕太郎に会うことを命じた「上司」とは、一体誰であろうか。この指示は、当時の南山の置かれていた状況を考えて、極めて適切なものだったといえる。というのも、この学校教育局は、学校教育行政の一元化を図る趣旨から従来の専門教育局と国民教育局が統合されたもので、面談の前月に発足したばかりの、中等教育と高等教育の双方を管轄する組織であったからである。田中は、その初代局長である。なお、この学校教育局は、4年後の昭和24年には、また初等中等教育局と大学学術局に分かれることになる¹⁰⁾。

この時の南山学園理事長は、松岡孫四郎名古屋教区長であった。戦前、宗教の国家統制を強める宗教団体会法が1939年に施行され、日本のカトリック教会・修道会（もちろん神言会も）は大きな困難に直面することになり、これに対応するため、教区長会議は、外国人教区長は辞任すること、各地の学校長を日本人に変更すること、理事員数の大多数を日本人にすること等を決定していた¹¹⁾。こうした経緯から、南山学園も、名古屋教区主体で運営がなされていた。こうした事実を踏まえれば、パツへ校長式辞の中の「上司」とは神言会のメンバーには限らないことになるが、残された史料からはこれを特定することはできない。いずれにしろ、田中が敬虔なカトリック信者であることを知っていた人間であったことは間違いなからう。

なお、南山学園は、南山大学が開設される直前の1948年に名古屋教区から神言会に経営が移されることになり、理事長にはフォーベル・フラッテン（その後、南山短大初代学長を務めた）が、中学校長および同年から始まった新制高等学校長にはパツへ外専校長が兼任という形で、それぞれ就任した。

10) 文部科学省 (<https://www.mext.go.jp/>) 「学制百年史」より。

11) 歩み47頁、学園75年誌55頁。

3. 文部省学校教育局長としての田中耕太郎

南山のその後の運命を決するアドバイスを文部省学校教育局長である田中耕太郎からもらったわけであるが、そもそも、東京帝国大学の教授である田中が、なぜ、その時、文部省の一部局長である学校教育局長に就任していたのか。極めて異例なことである。これは、戦後の教育改革のなせる業であるといえる。

戦後の日本の教育改革の中心的課題は、教育の民主化と6・3・3・4制の実施にあった。そして、この6・3・3・4制の実施主体がまさに学校教育局である。田中は、当時の文部大臣前田多門の懇請により就任したのであるが、この点について、彼は、そもそも「文部行政は教育に関し、識見と体験とをもつ教育者によって運営すべきであり、純然たる行政官に任すべきものではない」¹²⁾という考えをもっていた。そして、「前田さんの下でなら働き甲斐があると思った。また専門学校教育局長なら話は別だが、大学、専門、小中学、実業等、一切の学校の行政を管理することになるから、これは教育一般に関する自分の抱負を実現するには絶好の機会にちがいない。」¹³⁾と判断した結果の就任であったようである。

学校教育局長としての田中の仕事ぶりについては、当時、同局長付の事務官を務めた相良惟一（後に、京都大学教授、聖心女子大学学長を務めた）が、田中耕太郎の追悼集において詳細に紹介している¹⁴⁾。相良は、自らも敬虔なカトリック信者であって、田中とは東京帝国大学在学中からカトリック研究会等を通じて親交があったようで、「学生時代にはむしろ学問の上よりも、おそらく信仰の上から先生からどれほど大きなものをいただいたか分からない」

12) 田中耕太郎『私の履歴書』（春秋社、1961年）74頁。

13) 同上。

14) 相良惟一「教育行政・教育立法」鈴木竹雄（編）『田中耕太郎 人と業績』（有斐閣、1977年）102頁

とも述べている¹⁵⁾。実は、南山学園創立 25 周年を記念して編集された『南山学園の歩み』の中に、相良の名前がやや唐突に出てくる場面がある。引用の形で書かれている外専創設時のパツへの回想である。すなわち、「田中先生は、学校をつくるならいいかげんなものではなく、しっかりしたものをつくりなさい、とって秘書の相良惟一さんに課長のところに案内させました。田中先生が文部大臣になり、相良さんが専門教育課長となって、南山外国語専門学校が認可されたことは、まったく摂理的なことでした。」¹⁶⁾と述べている。パツへ校長が文部省を訪問し、そこで二人の敬虔なカトリック信者に会い、かつ貴重なアドバイスをもらうことができ、その結果、開校に至ったのである。「摂理的」と表現したその思いは、こうした事情を踏まえれば十分に理解することができる。

いずれにしろ、戦後日本の教育改革全体を取り仕切っていた現場の総責任者ともいべき学校教育局長から直接にアドバイスをもらったのである。これほどまでに心強いものはなかったであろう。今日の文部行政では、ちょっと考えられない。いくつもの幸運が重なり、1945 年 11 月の出来事が生じたのである。感謝するばかりである。

4. 外国語専門学校の設置認可

戦後の高等教育の改革は、言うまでもなく、従来の大学、大学予科、高等学校、専門学校、高等師範学校、師範学校等の複線的で多様な高等教育機関を、単一の四年制大学に改編しようとするものであった。従って、旧制高等学校も旧制の専門学校も廃止する方向性は、早い段階から確認されていた¹⁷⁾。そうした中で、南山学園として新たな高等教育機関を設けようと考

15) 同書 597 頁。

16) 歩み 62 頁。

17) 海後宗臣 = 寺崎昌男『大学教育〈戦後日本の教育改革 第 9 巻〉』（東京大学出版会、1969 年）62 頁以下。

え、その手がかりを旧制高校にするか専門学校にするかが問題になっていたわけである。結局、専門学校をつくることになるのであるが、実際、専門学校は、戦後だけでも72校も設置されている。このうち、私立専門学校が50校を占めている¹⁸⁾。田中のアドバイスは、まさにこうしたその後の動向を見越した上でのものだったのであろう。現代であれば、あり得ないアドバイスなのかもしれない。

とはいえ、いかに有効、有益なアドバイスがあろうとも、さすがに高等教育機関を初めて作るとなれば、越えなければならないハードルは低くはないし、少なくともない。加えて、1945年11月に相談をし、その4カ月後の翌年3月に設置申請をしているのである。時は、戦後直後の混乱期であり、物資不足も甚だしい。

1946年3月に文部省に提出した南山外国語専門学校設置認可理由書によれば、「計画ニ要スル基本金ノ大半ハ〔名古屋〕教区本部ヨリ寄附ノ形式ニオイテ支弁セラルル予定ニシテ既ニ供託金貳拾万円ハ特別定期預金トシテ用意セラレ……事業資金トシテ別ニ参拾万円程度ヲ準備セリ」と説明する一方で、校舎については「中学校本校舎ヲ使用シ中学校々舎トシテハ……以前ノ小学校々舎ヲ使用スル予定」であるとしていた。苦心のやり繰りを反映した設置認可理由書になっていたが、幸いのこと、設置認可書が同年7月に交付された¹⁹⁾。許可者は、これより前、同年1月に文部大臣に就任していた田中耕太郎である。設置許可書とともに、学校教育局長による通達書も交付され、そこには、校舎を増築し速やかに中学校と分離すること、寄附金等の受入を迅速かつ確実にを行うことが留意事項として付されていた²⁰⁾。慌ただしい

18) 戦後の専門学校の設置状況については、永井英治「戦後設置の専門学校の歴史的意義——外国語専門学校の『遺産』」南山大学アカデミア人文・社会科学編(82)2006年1月175頁に詳しく分析されている。同論文の178頁以下に、戦後設置の専門学校が一覧表にして示されている。

19) 外専史料集29頁。

20) この留意事項は、翌年、南山外国語専門学校が学科を増設する際に問題となり、文部省から条件未履行で当該書類が返戻されている。南山は、神言会からの5万ドルの

船出であることは間違いなかった。

II. 南山(名古屋)外国語専門学校・南山大学の開設

1. 文部大臣田中耕太郎の祝辞

1946年9月の外専開校式に、文部大臣としての田中が祝辞を寄せている。祝辞全文は、外専史料集41頁以下に掲載されている。祝辞は田中自ら作成したのか官僚により作成されたものなのか、史料からは判断しがたい。それは、冒頭、「此度南山外事専門学校が設立せられ九月十四日を期して開校式が挙行せらるるに当つて一言所感を述べて……」という文章で始まっている。揚げ足取りのような指摘で恐縮であるが、校名を間違えているのである。後半にも南山外事専門学校が1カ所、別に外事専門学校という表現も1カ所、存在する。前述の戦後の専門学校設置において、南山のように外国語教育を中心にした専門学校は5校設けられているが、このうち2校は外国語専門学校という名前であるが、他の3校は外事専門学校と称していた²¹⁾。こうした経緯からこの間違いが生じたものと思われるが、この間違いゆえに、この祝辞は田中本人の手になったものと推測されうる。官僚作成の祝辞であれば、対象校の名前を複数回にわたり間違えるとは、とても思われぬ。また逆に、大臣自らが作成していた祝辞であれば、大臣が依頼しない限りは、その文章をチェックする機会は官僚にはなかったであろう。その結果、大臣の思い込みが、そのまま表記されることになったのである。祝辞の中で、外国語の修得を「意思疏通」とともに「国際的通商」のためとしているところ

寄附証明書等を提出することにより、これに対応し、学科増設を実現している(外専史料集55~60頁)。

21) 歩み61頁によると、当時の外事専門学校は、外国語だけでなく貿易、商学、経済学、外交、法政も教授していたので、外国語専門の名称を使わなかったとのことである。南山の場合は、ある教授の提案で「外国語専門」に決まったのだが、「南山外語の学生は外事専門の名称を希望していた」ようである(同上)。

も、商法学者の田中の個性が出ているのではないかと思われる。

開校式では、出張中の当時の南山学園理事長松岡孫四郎名古屋教区長に代わって、パッへの前任の中学校長である牧野房男理事が挨拶を行っている。そこでも、創立に至る経緯の紹介と関係者への感謝の言葉が述べられているが、その中に、「殊に現文部大臣田中耕太郎先生より賜りました、ご厚情に対しましては、私共は勿論のこと、生前先生と御親しくして居られました、今は天国の故ライネルス博士も、如何に感謝を献げて居られることかと存じます。」という一文がある。名古屋教区の神父であった牧野の言葉であることからすれば、これは間違いのない事実なのであろう。しかし、それを示す事蹟を、南山に残されている史料から見つけることはできなかった。現状では、この挨拶文がライネルスと田中の交流に言及する唯一のものである。

2. 外専での講演会（1947年10月）

外専の開校式から4か月後、田中は、突如、文部大臣を辞任することとなる。6・3・3・4制を昭和22年から実施しようとする文部省と、主に財政的事情からこれを引き延ばそうとする内閣の対立から、時の吉田総理に求められ、辞任することとなった²²⁾。その後、参議院議員に就任していた田中は、外専開校から1年余経過した1947年10月27日、外専の全学生を対象とした講演会のため来学する。講堂で行われた講演会の様子が、名古屋外語新聞²³⁾昭和22年12月10日(水)1面で報じられている。記事中、「本校に一泊」とあることから、教師館であるピオ十一世館²⁴⁾に宿泊したものと思われる。

「先ず“生き方”を考えよ」という見出しが付けられた講演で、田中は、次

22) 大臣を交代させたものの、6・3・3・4制は、後述するように、当初の予定通り昭和22年から始まった。前掲『田中耕太郎 人と業績』120頁以下および609頁参照。

23) 校名については、前掲注1)を参照。

24) 現在のピオ十一世館は、1953年竣工であり、立地している所も異なる。外専史料集(巻末30頁)によると、当時の教授会もピオ館で行われていたようである。

のようという。「如何に生きるか。この大問題に諸君が情熱を傾倒され、一切の知識を体験をこの問題解決の鍵とせられることを私は衷心から切望する。甚だ抽象的ではあるけれども、この問題解決の方法はつまるところ諸君一人ひとりの努力と熱情にまつより仕方ないのである。……もし私が私の辿ってきた道を諸君に語ろうとも、それはあくまで私一個の人生探求であり諸君の参考にはなれ、決してそのまま諸君に当てはまるものではない。苦しい道であろう、しかし、諸君は行かねばならない。くじけることなく、投げ捨てることなく。私は、今一度諸君の前に旗幟をかかげてはなむけとする、“まず生き方を考えよ”²⁵⁾。外語新聞の記者がまとめたものであり、実際の講演とは多少トーンの変わったところがあるかもしれないが、学生たちを相手に、実直で、実に熱い講演を行っている。「厳しい」、「信念の強い」²⁶⁾人であるといった、世上、定着している田中の評価とはかなり趣を異にする講演内容となっている。文部大臣や最高裁判所長官在職時の言動とは、まったく異なった印象を受ける。カトリックの学校の学生に対する特別な眼差しを感じるところである。

田中は、1950年3月に最高裁判所長官に就任するが、その翌年の1951年11月10日にも、現職の最高裁判所長官として講演のため南山に来学している²⁷⁾。写真集的な史料『南山学園五十年の歩み』（南山学園、1982年）12頁に、その際の写真が載っている。当時は、法学部もない文学部のみの大学であったが、たび重なる来学、講演はまさにカトリックの絆ゆえであろう。

3. 新制大学としての南山

田中は、前述したように、6・3・3・4制の実施に関する政争から、文部大臣

25) 名古屋外語新聞昭和22年12月10日付1面。なお、読みやすくするため、一部の読点を句点に変えている。

26) 前掲『田中耕太郎 人と業績』505頁、510頁参照。

27) 前掲『南山大学五十年史』付録年表4頁。

を辞任するのであるが、この制度自体は、結局、当初の予定通り 1947 年から始まり、全国の新制高等学校も計画通り翌 1948 年に設置された。そして、新制大学の制度は、1948 年からスタートすべく全国各地で準備が進められていた。

ところが、一部の大学すなわち次の 12 公私立大学が、他の大学に先立ち認可を受け、1948 年 4 月からスタートしている。その 12 大学とは、公立の神戸商科大、私立の上智大、國學院大、日本女子大、東京女子大、津田塾大、聖心女子大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大、神戸女学院大である。これら 12 大学の先行発足は、文部省の教育統制を嫌う連合国軍総司令部 (GHQ) 民間情報教育局 (CIE) の意向が強く働いた結果であるとされる²⁸⁾。私立大学 11 校についてみれば、キリスト教系大学が 6 校、また女子大学が 5 校という構成である。そこには、この間の CIE と文部省のさや当た部分的な部分も読み取れるが²⁹⁾、それはともかく、当時、南山大学はこうした動きとは無縁だったようである³⁰⁾。

実は、南山も、この CIE とは早くから接触をしている。専門学校設置申請中の 1946 年 6 月に、パッヘが「総司令部の宗教課係官を訪問し、名古屋に新しい college を設立する」³¹⁾と伝えているのを皮切りに、外専門校式の翌月には大学設置に関連する計画が GHQ の教育方針に合致するかどうかを問い合わせている。翌 1947 年にも CIE を 2 度訪問している。その際パッヘに対応した CIE 顧問 A・デル・レは、その後南山大学の教授になっている³²⁾。こうした事実から、南山が当時の CIE の考えあるいは上記のような動きを認識していなかったとは思われない。

28) 前掲『大学教育〈戦後日本の教育改革 第 9 巻〉』96 頁以下。

29) 同書 97 頁で引用されている日高等学校教育局長の述懐参照。

30) 南山学園史料集 13『南山大学設置認可申請書』(南山アーカイブス、2018 年) 165 頁においても、「南山には、そのような働きかけを示す資料が確認されていない」(永井英治執筆)とされている。

31) 前掲『南山大学五十年史』27 頁(岡部朗一執筆)。

32) 同書 28 頁。

南山大学に1948年設置に向けた動きがまったく見られないのは、46年に外専をスタートさせたばかりで、とても48年に新制大学を設置する余裕がなかったのもその一因であろう。しかし、それ以上に、そうした動きがみられない理由としては、戦後の6・3・3・4制実施のため努力した田中耕太郎の存在が大きかったのではないかと筆者は考えている。『南山学園の歩み』93頁には、「名古屋外国語専門学校の昇格対策は大学基準制定（昭和二十二年七月八日）前から考究されており、……〔1948年〕秋参議院議員田中耕太郎、文部政務次官永江和夫両氏の来学によって昇格具体策が進み、二十四年度の大学開設を期することになった。」³³⁾という記述がある。外専から大学への切替時についても、南山は、田中の具体的な指導を受けていたのである。

6・3・3・4制に当初は慎重な態度をとっていた田中であるが、途中からそれを強力に推進する立場になり、文相時には、膨大な出費を伴うことから反対する閣僚らと閣議で闘っていたのである。そして、それが原因で文部大臣を辞めているのである。その田中の助力を得て、今また新制大学を設置しようとする南山としては、田中の進めてきた施策に抗うこととなるような行為はとてできなかったであろう。その結果、すべての国立大学や多くの私立大学と同様、1949年設置の新制大学の一つとして、南山大学は、その歩みを進めることになったのだと思われる。

4. 学校法人南山学園評議員

戦後の教育改革は、私立学校のあり方も変えることとなった。多くの新制大学がスタートした直後の1949年12月に私立学校法が制定され、学校法人による学校経営が始まった。そこでは、私立学校の自主性、公共性が謳われ、執行機関たる理事会に意見をいう組織として評議員会が必ず設けられることになった³⁴⁾。

33) 歩み93頁。

34) 福田繁＝安嶋彌『私立学校法詳説』（玉川大学出版部、1950年）21頁。

南山学園も、翌 1950 年 12 月の理事会で、財団法人から学校法人へ組織変更することを決定した³⁵⁾。翌年 3 月認可を受けて、理事 5 名、評議員 11 名がそれぞれ選出された。理事はすべて神言会会員が就任し、評議員は、神言会会員 5 名、南山大学代表 3 名、卒業生代表 1 名、学識経験者 2 名の構成となった。そして、この学識経験者としての初代評議員に、田中耕太郎が就任しているのである。ちなみに、もう一人の学識経験者評議員は名古屋大学の勝沼精蔵総長（当時）であった³⁶⁾。

田中は、1950 年 3 月から最高裁判所長官に就任している。最高裁の兼業ルールが気になるところであるが、当時の学校法人登記令によれば、「役員の名及び住所」（1 条 2 項 6 号）は登記事項とされていたものの、学校法人の評議員はその役員には含まれないとされていた³⁷⁾。また、評議員には、役員のような欠格事由に関する規定もなかった³⁸⁾。こうしたことから、兼業が認められていたのであろう。

南山学園評議員に就任したものの、田中は、評議員会には出席していなかったようである。記録では、いずれの回においても出席者にその名前が出ていない。当時の評議員会の記録は欠席者欄がなく、従って、田中が評議員を継続していたかどうかも断定しがたい。とはいえ、辞任、解任といった記録もないことから、それは継続していたと思われる。

南山学園は、1958 年 12 月に、学園の発展に伴い、評議員の定数を増やすこととし、寄附行為を改正した。これにより評議員を 4 名増員し、15 名体制にした。この 15 名の中には、田中の名前はない。このことから、彼は、1951 年から 1958 年の 7 年間にわたり、南山学園評議員を務めたと判断できる。

35) 学園 75 年誌 313 頁。

36) 学園 75 年誌 314 頁、歩み 107 頁。

37) 前掲『私立学校法詳説』158 頁。学校法人登記令を引き継いでいる「組合等登記令」においても、評議員は登記事項とはされていない（小野元之『私立学校法講座〔平成 10 年改訂版〕』（経理研究会、1998 年）189 頁）。

38) 前掲『私立学校法詳説』177 頁。

ところで、この15名の評議員は多くは従来からの再任であるが、その中であって、新評議員として井上紫電が選ばれている³⁹⁾。井上紫電は、翌1959年4月1日に、福島大学経済学部から南山大学社会科学部に赴任する教授である。赴任する直前に、南山学園評議員に就任するという、いささか奇妙な人事になっているが、これも、田中耕太郎ゆえである。井上紫電については、南山法学3巻3号において同教授退職記念号が編まれている。八木弘初代法学部長によれば、彼の「研究・教育は、終始一貫、教授の敬虔なカトリック信者としての厚い信仰と深い識見に裏打ちされた貴重なものであった⁴⁰⁾と評されている。研究業績が21件ほど並んでいるが、その半分ほどは、妊娠中絶に反対の立場から人工中絶や優生保護法改正を論じたものである。確かに、そこには強い信念を窺うことができる。

田中耕太郎自身、自著の中で井上紫電の名前を挙げている⁴¹⁾。田中は1926年4月にカトリックの洗礼を受けるのであるが、「ちょうどそのころ、東京大学でカトリック研究会が発足した」事実を紹介し、「当時、井上紫電、大塚市助、中尾文策の諸君、私の実弟の飯守重任など〔プロテスタントからの〕改宗者が続出した、これらの諸君は法科の学生だった」としている。井上は、1931年3月に東京帝国大学法学部を卒業しており⁴²⁾、田中の教え子の一人でもあった。戦前のカトリック本郷教会での田中の活躍を紹介している追悼文が『田中耕太郎 人と業績』に収録されている。カトリックのシスターであるその筆者は、当時の様子を、「明日、先生が〔貴族院の〕委員会の答弁に出られるという前日の日曜、信者集会室では先生を囲んで、青年会の井上紫電さん（南山大教授）、豊崎光衛さん（学習院大教授）、萩原弥彦さん、故大塚市助さんらの東大生、兄の秀一（水戸高校生）らが、『先生、明日は何とお答

39) 1958年12月10日南山学園理事会議事録および同年12月11日南山学園評議員会議事録による。

40) 八木弘「井上紫電教授を送る」南山法学3巻3号（1979年）168頁。

41) 前掲『私の履歴書』284頁。

42) 前掲南山法学3巻3号171頁。

えになるのですか?』と心配そうに尋ねた⁴³⁾と描写している。

これらの記述からは、田中と井上の二人の間には長く、深い結びつきがあることがわかる。田中は、1958年に南山学園評議員を辞めるに際して、神言会神父の求めに応じて⁴⁴⁾、その井上を推薦したものと思われる。

田中は、その後、1960年11月にオランダ・ハーグの国際司法裁判所の判事に就任する。その就任期間中のことと思われるが、「南山大学新校舎建設後援会」の発起人にも名前を連ねている⁴⁵⁾。南山大学は、前述したように旧制中学校の校舎を利用する形で始まったが、その後の拡充により、校地、校舎が手狭となり、約1kmほど離れた地に全面移転することとなった。それが現キャンパス⁴⁶⁾であるが、それはともかく、その際、資金をいくらかでも確保するため募金活動を行うこととなった。その活動主体が、当時の名古屋商工会議所会頭の伊藤次郎左衛門が会長に就任した「南山大学新校舎建設後援会」である。田中は、愛知県知事や名古屋市長と並んでその発起人に加わっている⁴⁷⁾。田中は、海を越えて協力していたことになる。

むすびに代えて

大学75周年記念式典をきっかけに、「南山」と田中耕太郎の関わりを南山学園や南山大学に残されている史・資料を中心に検討、分析することとなった。その結果、南山大学は、外専発足当初にとどまらず現キャンパス建設に

43) 高嶺貞子「落日のかがやき 田中耕太郎先生の思い出——キリスト者と政治——」前掲『田中耕太郎 人と業績』460頁。

44) 1958年12月4日開催の南山学園理事会および評議員会において、評議員増員に關して「該当者を理事長及び沼沢、ポンセレット両理事に於て物色すること」が承認されている(同議事録)。

45) 学園75年誌157頁。

46) 現キャンパスは、チェコの建築家アントニン・レーモンドにより設計され、1964年に竣工した。なお、レーモンドは、この設計により1964年度日本建築学会賞を受賞している。

47) 学園75年誌157頁。

至るまで、実に長きにわたり田中耕太郎の助力を得てきたことがわかった。中には評価が分かれそうなサポートもないわけではないが、彼が南山のためにはと思い、色々と力を貸してくれたことは間違いのない事実であろう。すべては、カトリックの結びつきのお陰である。カトリック・ネットワークの強さを、あらためて感じるところでもある。

そうした中で、いささか残念だったのは、収集、閲覧した史・資料の中に田中耕太郎が南山に関して直接記したものを、(文部大臣祝辞を除き)見つけることができなかつたことである。20年近くにわたるサポートに感謝しつつ、田中自身が、そのことをどのように感じ、評価していたのか、南山大学の教員としては、やはりその点は聞きたかつたところである。